

## マタイによる福音書5章9節 「平和を造る者」

### 1A 世のものではない神の国

1B ユダヤ人の望んでいた軍事的救済

2B 心の問題

### 2A 神の義による平和

1B 義への飢え渴きから来る平和

2B 神との平和

3B 神の平和

4B 人との平和

### 3A 平和を「造る」こと

1B 聞くに早いこと

2B キリストの視点で見ること

3B 知恵による行動

### 4A 神の子

1B 万物との和解

2B 神に似た者

## 本文

マタイによる福音書 5 章を開いてください、私たちの山上の垂訓シリーズの学びは、5 章 9 節にあります。「**平和をつくる者は幸いです。その人たちは神の子どもと呼ばれるからです。**」

私たちが山上の垂訓にある、イエス様の教えを見て行く時、それが、キリスト者としての生き方の土台であり、また特徴であることを見えています。キリスト者であるなら、キリストの弟子、キリストについて行く者であれば、何をもってそうなのか？ということを見ることができます。イエス様は、天の御国を宣べ伝えていますが、その中にある幸いについてお語りになり始めました。八福、八つの幸いと呼ばれますが、初めに、「心貧しき者」次に「悲しむ者」、それから「柔和な者」が幸いです。これが、心の内で起こっていること、神との関係を示していました。

そこから、外に向かいます。「義に飢え渴く者」です。自分の内に何ら義、正しい者がないと悟った者であるからこそ、自分以外にところに義を追い求めます。神ご自身が義であり、この方をキリストにあって信じる者が義とみなされます。そして「憐み深い者」です。他者に対する憐れ深さは、自分自身が義に飢え渴いている時に、与えられます。つまり、自分自身の弱さを知っているからです。罪を犯している者、また犯してしまって悩んでいる者に対して、裁きを下すことができず、その人が罪から立ち直ることができるようお願い、共に悩みます。そして、次に「心の清い者」であります。

人に憐れみを示していく中で、心の清さが試されます。何か自分の内から悪い思いが出てきて、それが自分を試します。しかし、力を尽くして心を見張ることによって、そこから御霊の泉が流れ出ます。その中で、神を、神の世界を見て行くことができます。そして次に、「**平和をつくる者は幸い**」なのです。義に飢え渴き、その中で憐れみを示し、そのために心を清く保っている中で、自分自身が人と人との間にある争いを仲介し、それまでなかった平和を造り上げているということです。

## **1A 世のものではない神の国**

### **1B ユダヤ人の望んでいた軍事的救済**

イエス様の口から、この言葉を聞いた時には、ユダヤ人たちは、あまりにも自分たちの考えている天の御国とはかけ離れているので、驚いていたことでしょう。時はローマ時代、異邦人による支配と圧政で苦しめられていて、メシアの到来を熱望していたような時期でありました。聖書の中に約束されている、異邦人の力を打ち砕き、それから神の国が到来するという、軍事的な力による御国の到来を彼らは信じていました。

メシアについての預言には、確かにそのようなメシアの働きの預言が数多くあります。ダニエルは、人手によらず切り出された石としてメシアを描き、それが人の像の足の部分に当たって、それで人の像全体が打ち碎かれる夢をネブカドネザルが見たことを伝えましたが、人間の国が打ち碎かれ、それから大きな山、つまり神の国が立てられることが書かれているのです。けれども、同時にダニエルは、9章にて油注がれた者が断たれるという、受難の預言もしているのです。イザヤも、ガリラヤにおいて、闇の中を歩んでいた民が大きな光を見るけれども、「**あなたが、彼が負うくびきと、肩の杖、彼を追い立てる者のむちを、メディアンの日になされたように、打ち碎かれるからだ。(9:4)**」やはり、力をもって敵を打ち砕く預言になっています。しかし、同じイザヤは、鞭打たれ碎かれる主の僕をも預言しており、一見、矛盾しているのです。ローマ時代のユダヤ人たちは、力によって異邦人の国々を制圧して、戦いを終わらせるメシアのみを求めていたために、そのメシア像は、政治的であり、また軍事的だったのです。「復活」の映画に出て来るメシアのことを思い出してください、熱心党の者たちがローマ兵と血みどろの戦いを繰り広げ、捕えられたリーダーが処刑される前に、「メシアが来るまで」と言って死にました。ローマ人が聞いていた「メシア」は、そういった文脈の中で語られていたのです。

しかし、イエス様は「平和を造る者は幸いです」と言われたのです。ローマに対する態度がまるで違うことにお気づきでしょう。主が、ユダヤ人たちに捕えられる時、剣をもって戦おうとしたペテロに対して、「**剣を鞘におさめなさい**」と言われ、そしてローマ総督ピラトに対しては、こう言われました。「**わたしの国はこの世のものではありません。もしこの世のものであったら、わたしのしもべたちが、わたしをユダヤ人に渡さないように戦ったことでしょう。しかし、事実、わたしの国はこの世のものではありません。(ヨハネ 18:37)**この世のものではないから、剣をもって御国が広がることはないのです。十字軍による聖地奪還のよなことは、ないのです。そして、御国はそうではなく、この

方の甦りを目撃した者たちが、それを証していったことによって広がって行きました。ローマとしては、剣をもって戦う者たちのほうが、まだ理解できたことでしょう。しかし、甦ったと証言する者たちによって変わるの、一人一人の人生の大変革であり、その人生を変えるための、心の一新だったのです。

## 2B 心の問題

私たちはとかく、自分の周りの環境を変えることによって争いの状態がなくなるとしてしまします。けれども、それは一時的なもの、対処的なものとしてはその通りですが、根本治療ではありません。なぜ争いが起こるのかは、私たち人間の中にある欲望であると、ヤコブははっきりと手紙の中で教えています。「4:1-2 あなたがたの間の戦いや争いは、どこから出て来るのでしょうか。ここから、すなわち、あなたがたのからだの中で戦う欲望から出て来るのではありませんか。あなたがたは、欲しても自分のものにならないと、人殺しをします。熱望しても手に入れることができないと、争ったり戦ったりします。自分のものにならないのは、あなたがたが求めないからです。」イエス様も、外側からのものは中に入っても出て行くだけで、内側から出て来るものが人を汚すことを語られました。「マタ 15:17-19 口に入る物はみな、腹に入り、排泄されて外に出されることが分からないのですか。しかし、口から出るものは心から出て来ます。それが人を汚すのです。悪い考え、殺人、姦淫、淫らな行い、盗み、偽証、ののしりは、心から出て来るからです。」

あれだけの惨事を世界にもたらしたアドルフ・ヒトラーですが、ベルリンが連合軍によって攻撃をされ、彼が自殺する前に、自分は死ぬことになるが、100年後にはナチズムは甦るといような言葉を残したと言われます。そして世界は、確かにそのような方向に進んでいるかもしれないという徴候を見ます。つまり言い換えれば、ヒトラーが出てきたというのは、人間の中にある有象無象の欲望を体現化したともいえるかもしれないからです。ヒトラーの掲げていた思想は、憎むべきもの、唾棄すべきものですが、実はその憎むべきものが自分の中にも潜んでいるということです。

ですから、平和を造る者は幸いであるというイエス様の言葉の前に、心の清い者は幸いですという言葉が語られているのは、意味があります。聖霊の刷新によって、私たちの心が清められ、それで神は救いを成し遂げようとされています。「テトス 3:3-5 私たちも以前は、愚かで、不従順で、迷っていた者であり、いろいろな欲望と快樂の奴隷になり、悪意とねたみのうちに生活し、人から憎まれ、互いに憎み合う者でした。しかし、私たちの救い主である神のいつくしみと人に対する愛が現れたとき、神は、私たちが行った義のわざによってではなく、ご自分のあわれみによって、聖霊による再生と刷新の洗いをもって、私たちを救って下さいました。」

ですから、私たちキリスト者の働きは、一見、あまりにも遅々として進まないように見えますし、小さな働きで、世界の平和に貢献しているようには見えないかもしれません。けれども、それこそが最短の道であり、イエス様がサタンの誘惑によって世の栄華や富ではなく、十字架の道によって、

世界の多くの人々を平和への道に導いて行かれたのです。

## 2A 神の義による平和

### 1B 義への飢え渇きから来る平和

先にお話したように、平和は、神の義から始まります。イザヤ書を見れば、神の正義があって、それから平和が満ちることが数多く書かれています。メシアの預言を読みます、「9:6-7 ひとりのみどりごが私たちのために生まれる。ひとりの男の子が私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に就いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これを支える。今よりとこしえまで。万軍の【主】の熱心がこれを成し遂げる。」正義がなければ平和がないということ、覚える必要がありますね。しばしば、何でもかんでも戦わないことが平和であるという偽りの教えが語られます。イエス様は、ご自身は平和ではなく、剣をもたらしに來たのだと言われました。それは、平和の否定ではなく、むしろ正義があってこそその平和であり、平和を壊す分子を潰さなければ平和は来ないということです。

そしてその平和の君はキリストご自身であり、この方が主権を持ち世界を支配されることによって、それで平和が地に満ちます。ですから、まずは神が義であられて、人には義がなく、不義と不正で一杯なのだという原点に立ち戻る必要があります。

### 2B 神との平和

世界は、実は全く異なる次元で戦争が絶えず起こっています。国と国、民族と民族の戦争や、個人と個人の間での争いはありますが、けれども、壮大なレベルで起こっているのは、「神に対する戦い」です。人は罪を犯しているというのは、神とその定めに対して反逆して、戦いを挑んでいると言えます。そして神は、人々をその正義によって滅ぼすことができになります。詩篇第二篇では、神とメシアに対して、国々が相集まって一つになって逆らうことが預言されていますが、終わりの日にはそうした人々の心が神とキリストに、世界の軍隊として反抗していくことで、最も明らかにされます。

ですから、神との戦いにおいて、私たちがその制裁を受けて滅ぼされる前に、神ご自身がその戦いを終結させてくださったのです。それが、キリストの十字架です。この方が神に対する敵意を、十字架の上で受けてくださって、取り除いてくださいました。それによって、キリストを信じる者との間に神との平和が確立します。「ロマ 5:1 こうして、私たちは信仰によって義と認められたので、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。」神との平和です。

### 3B 神の平和

私たちはもう既に、神の正義による怒りによって滅ぼされることはないことを知り、神との和解、

神との平和を知る時に、自分自身を神にすべてお任せにする信頼が生まれます。そして、すべてのことについて、神が御座におられ、支配しておられることを知って、それで思い煩いも何もかも、神に申し上げていくことによって、神が自分の心の思いを守ってくれます。神との平和のみならず、神の平和を私たちは持つことができます。日本語では、それを平安と言い直しますね。「ピリ4:6-7 何も思い煩わないで、あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、すべての理解を超えた神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。」

#### 4B 人との平和

神との平和があり、そして心が神の平安で守られて、それで初めて、人と人との間のキリストの平和が与えられます。エペソ2章14-16節です、「実に、キリストこそ私たちの平和です。キリストは私たち二つのものを一つにし、ご自分の肉において、隔ての壁である敵意を打ち壊し、様々な規定から成る戒めの律法を廃棄されました。こうしてキリストは、この二つをご自分において新しい一人の人に造り上げて平和を実現し、二つのものを一つのからだとして、十字架によって神と和解させ、敵意を十字架によって滅ぼされました。」これはユダヤ人と異邦人の中での平和と和解です。私たちが単に個性や背景が異なるだけで、大きな違いの中で断絶や分離を味わいますが、民族は違う、習慣は違う、国は違うとなりますと、その断絶の淵はあまりにも深いです。そして律法によって、ユダヤ人と異邦人との壁は、私たちの想像を超えています。それを、私たち一人一人がキリストに近づくことによって、隔ての壁が崩れて、一つにされるということです。ここで大事なのは、平和とは、ただ争いがないという意味ではありません。むしろ、もっと積極的な結びつきです。具体的に関わることです。共に交わることです。共に交わらないところには、言い争いのようなものはたとえなくとも、聖書的には、敵意という壁がしっかり設けられています。

#### 3A 平和を「造る」こと

ここで、イエス様の言葉が、「造る」となっていることに注目してください。平和がないところに、平和を造っていくという積極的な意味合いがあります。そこには、これまで自分が留まっていたところから、一歩踏み出し、神の世界に対する働きかけ、特に福音宣教に対する働きかけの中で、平和を造っていくことに私たちが召されているということです。

#### 1B 聞くに早いこと

具体的には、「聞くのに早く、語るのに遅く、怒るのに遅く」というヤコブの言葉があるでしょう。「1:19-20 私の愛する兄弟たち、このことをわきまえていなさい。人はだれでも、聞くのに早く、語るのに遅く、怒るのに遅くありなさい。人の怒りは神の義を実現しないのです。」これは、単に意思伝達の方法を話しているのではなく、私たちの正しい基準や判断というのは、実は神の前では不十分なものであるということの認識です。神のみが正しいのであって、自分がどんなに相手が間違っていると感じても、どんなに違いがあっても、それでも主が置かれているのだということで、受

け入れ、そして聞いて行くという事が必要です。まるで、考えが違う人がいても、それでも早急に裁くのではなく、まずは聞いて理解することが必要です。

## 2B キリストの視点で見ること

そして、キリストが見ているように見て行く目を持つ必要があります。イエス様は、罪人を救うために世に来られました。そして、99 匹の羊を置いても、1 匹の迷った羊を捜すような方です。そして、誰もが見向きもしない人に目を留められます。例えば、生まれつきの盲人であるとか。そこに神の大なる栄光が現れることを見ました。また、一レプタしか持っていない貧しいやもめが、最も献金をしたとイエス様は弟子たちに語られました。また、人々から蔑まれている取税人ザアカイにも、「今日、あなたの家に泊まることになっている。」と言われました。そして、絶対に行かないサムリアの地域、しかもそこにいる女、しかも不道德な女にイエス様は話しかけられます。私たちの中にいつの間にか抱いている偏見というか、固定観念があります。それを破る必要があります。

## 3B 知恵による行動

そして知恵による行動が必要です。人と人が分裂する時に、一つの言葉がある時に、まとまります。それを知恵と呼びます。エルサレムの会議で、異邦人が割礼を受けて救われるのかどうか？を議論した時に、ヤコブが立ち上がり、御言葉を取り上げて一致を保ちました。それは聖霊によって行ったと書かれています。ヤコブは手紙の中でこう言いました、「3:17-18 しかし、上からの知恵は、まず第一に清いものです。それから、平和で、優しく、協調性があり、あわれみと良い実に満ち、偏見がなく、偽善もありません。義の実を結ばせる種は、平和をつくる人々によって平和のうちに蒔かれるのです。」

## 4A 神の子

### 1B 万物との和解

そして約束は、「**神の子どもと呼ばれるからです**」です。どうして平和を造ると、神の子供と呼ばれるのか？それは、神が平和の神であられ、すべてを和解させてくださる方だからです。「コロ 1:19-20 なぜなら神は、ご自分の満ち満ちたものをすべて御子のうちに宿らせ、その十字架の血によって平和をもたらし、御子によって、御子のために万物を和解させること、すなわち、地にあるものも天にあるものも、御子によって和解させることを良しとしてくださったからです。」

### 2B 神に似た者

ですから、神の子どもと呼ばれるというのは、神に似た者になっているという意味であります。イエス様が敵を愛しなさいと言われた時に、それは父がそうであるからということと言われましたね。「マタ 5:44-45 しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。天におられるあなたがたの父の子どもになるためです。父はご自分の太陽を悪人にも善人にも昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからです。」父なる神

がそうなのだから、だからあなたがたもそうでありなさいという命令です。神が和解を成し遂げた方であるから、あなたがたも和解の使者となりなさい、ということです。

これは、大きな、骨の折れる働きです。今は、紛争や対立、分断がこれまでになく大きな時代とされていますが、教会の間ではこれまでの対立に対する和解の時代とも言われています。例えば、私たちが関わっているキリスト者とユダヤ人との和解の働きの運動は、実に二千年近く続いているもので、ものすごい時代に私たちは入れられています。日本は、分断や孤独との戦いにいると思います。これもまた、人間業では埋めることのできないものです。それぞれの遣わされているところで、神の子と呼ばれるようになるために、平和を造る者になっているのだという召しを知りましょう。